

論文

殷代天文暦法に対する貞人集団の関与  
— 殷王室における貞人集団の役割についての新考察 —  
On the Calendar System by an Oracler Group in Shang Dynasty

高久 由美\*

TAKAKU Yumi

キーワード：殷代、甲骨文字、貞人、暦法

Key words: Shang dynasty, oracle bone inscriptions, oracler, calendar

1 はじめに

十九世紀末の甲骨文字発見とそれに引き続く研究によって、それまでその実在さえも疑問視されてきた殷王朝の実態が、次々と明らかにされてきた。暦法研究もまた、そのうちのひとつである。

董作賓氏は『殷暦譜』で、殷人は、天文観測を基に、極めて高度な暦法を築き上げていた、とした。すなわち、殷代は太陰年を355日、太陽年を365.25日として四分術を用い、第1期・第4期の旧派は十三月年末置閏がおこなわれ、これに対し第2期・第5期の新派は無節置閏による年中置閏がおこなわれていたとする説である<sup>1</sup>。

しかし、その後、陳夢家氏や島邦男氏はこれに反対し<sup>2</sup>、多くの天文学者たちのその後の、たとえば戦国時代における天文知識についての研究を例に挙げながら<sup>3</sup>、殷代において董作賓の言うが如き、進歩した暦法が確立していたとは考え難いとした。いわゆる「観象授時」即ち、素朴な方法での天文観測の結果を、自らの暦法によって作っている暦に、一～数年ごとに修正を加えることによって、太陽の運行に極力沿わせるべく努力する、という方法が採られていた、と考えた。

私自身は、暦法そのものについて深く研究しているわけではないので、それについて正確な批評を加えることはできないが、上述の点に関する限り、

---

\* 新潟県立大学国際地域学部 (gaojiu@unii.ac.jp)

その後の研究 — たとえば、楊升南氏や馮時氏の研究 — も、董氏の見解に則ったものとは申しがたいであろう<sup>4</sup>。このような殷代暦法そのものについての甲骨文研究の進展はさて置いて、では殷代におけるこのような天文観測やそれに基づく暦法の構成、毎年ごとに修正が検討されたであろう暦そのものの編成は、現実の問題として、誰により、どのような方法で行われていたのであろうか、といった点について、これまでどのような研究が存したか、寡聞にして知らない。また、甲骨文中にそのような点に直接触れるト辞が存するとも思えない。しかし、今、私は、ある甲骨片の内容を整理していく過程で、上記の如き問題点に結び付けて考えてよいのではないか、という、ある一つの異様な事象に気づいた。資料そのものは、甲骨文研究者であれば誰でも熟知の董氏の所謂「大亀四版」中の一版である。

以下に、これの分析とそれについての私の判断を述べて、諸先達のご示教を仰ぎたい。

## 2 甲2122（大亀四版之四）の分析

### 2-1 甲2122（大亀四版之四）の分析

甲2122は、1929年の殷墟第3次発掘において発掘された大亀四版の第四版であり<sup>5</sup>、董作賓の甲骨文断代研究における十個の標準のひとつである「貞人」の確定に多大な影響を与えたことは、周知の事実である<sup>6</sup>。後に、嚴一萍氏により甲2106と綴合された（合11546 図版参照）。

表1

㉓	㉒	㉑	㉐	㉏	㉍	㉌	㉈	㉇	㉅	㉄	㉃	㉁
癸亥	癸丑	癸卯	癸巳	癸酉	癸未	癸酉	癸巳	癸酉	癸丑	癸卯	癸巳	癸酉
60	50	40	30	10	20	10	30	10	50	40	30	10
五月	五月	五月	四月	四月	二月	二月	十二月	十二月	十二月	十一月	十一月	十月
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	×	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	賓	爭

当版のト辞は計23辞あり、そのすべてが所謂「貞旬ト辞」である。貞トは

全て癸日におこなわれているが、月名を記す辞と記さない辞が混在している。そこで、月名を記す貞卜のみを抜き出して一覧表にすると、表1ようになる。

さて、当時の暦法が全て完全に解明されているわけではないが、

1. 一月から十二月は、各々の月に三旬が割り当てられる（1ヶ月＝30日）<sup>7</sup>。
2. 観象の結果として、三月、六月、九月の前後と十三月に、1～3旬が閏旬として置かれた<sup>8</sup>。

これを前提として、甲2122辞に欠けたところを補って、当時の暦を再構成してみれば、次の如くになる。

- ① 癸酉<sub>10</sub> ト, 争貞：旬亡田？ 十月。
- ② □□ ト, 充□：□亡田？
- ③ 癸巳<sub>30</sub> ト, 賓貞：旬亡田？ 十一月。
- ④ 癸卯<sub>40</sub> ト, 𠂔貞：旬亡田？ 十一月。
- ⑤ 癸丑<sub>50</sub> ト, 𠂔貞：旬亡田？ 十二月。
- ⑥ 癸亥<sub>60</sub> ト, 𠂔貞：旬亡田？
- ⑦ 癸酉<sub>10</sub> ト, 𠂔貞：旬亡田？ 十二月。
- ⑧ 癸巳<sub>30</sub> ト, 𠂔貞：旬亡田？ 十三月。
- ⑨ 癸卯<sub>40</sub> ト, 𠂔貞：旬亡田？
- ⑩ 癸丑<sub>50</sub> ト, 貞：旬亡田？
- ⑪ 癸亥<sub>60</sub> ト, 𠂔貞：旬亡田？ □月。
- ⑫ 癸酉<sub>10</sub> ト, 𠂔貞：旬亡田？ 二月。
- ⑬ 癸未<sub>20</sub> ト, 𠂔貞：旬亡田？ 二月。
- ⑭ 癸□ □, 𠂔□：旬□田？
- ⑮ 癸卯<sub>40</sub> ト, 𠂔貞：旬□田？
- ⑯ 癸丑<sub>50</sub> ト, 𠂔貞：旬亡田？
- ⑰ 癸亥<sub>60</sub> ト, 𠂔貞：旬□田？
- ⑱ 癸酉<sub>10</sub> ト, □貞：旬亡□？ 四月。
- ⑲ □□ □, 𠂔貞：□□田？
- ⑳ 癸巳<sub>30</sub> ト, 𠂔貞：旬亡田？ 四月。
- ㉑ 癸卯<sub>40</sub> ト, 𠂔貞：旬亡田？ 五月。
- ㉒ 癸丑<sub>50</sub> ト, 𠂔貞：旬亡田？ 五月。
- ㉓ 癸亥<sub>60</sub> ト, 充貞：旬亡田？ 五月。

十二月下旬迄では、十月癸酉（10）と十一月癸巳（30）の間にもう一句癸未（20）の日があるはずである。後続の癸日が、癸巳（30）、癸卯（40）ともに十一月と記されており、癸丑（50）になると月が替って十二月にはいる



貞卜を行なっている、というこの事実は、この時期の複数貞人間の動向としては、極めて異常だと考えなくてはならない。

#### 4 考察

扱、以上の“事実”を基に、以下は私の推測に過ぎない。

甲骨文から知られる置閏法に定則がなかったであろうことは、これまでの多くの研究者に指摘されているところである<sup>9</sup>。「年末置閏」と「年中置閏」が屢々入り混じって出現し、武丁期甲骨中にも「生七月」といった例外的な「月」が出現する。何に準拠したか不明であるが、寧ろ、置閏法が確立しておらず、その時々 of 現状判断（観象結果）から、或る人間（ないし人間集団）によって、一定の原則のもとに、決定されていたのではないか。

甲2122の記載を整理した表によれば、某年末を挟む前年末と次年末とにおける貞人の参加状況には、極めて大きな状況変化がある。この状況変化には、何らかの“事情・原因”が存在した、と考えざるを得ない。それは何か？

その原因として考えられるのは、a) 外的要因とb) 内的要因であろう。

##### a) 外的要因

たとえば、次年、急にこの貞卜に参加しなくなった5人貞人が、正月はじめからの王の外征に従軍し、新年からの卜旬は、悉く、王都に残留した由一人が引き継いだのか、といった想定である。確かに帝乙・帝辛期の長期遠征に、貞人も従軍したと思われる記録は存する。しかし、武丁期の王の外征に、殆どの貞人が参加して、王都に1～2名の貞人のみが残留して卜旬を繰り返した、とは想定しにくい（この点については、更に詳しく論ずる方がよいと思う。）その他の“外的要因”も考えられなくはないものの、今、ここでは敢て避けておきたい。

##### b) 内的要因

以上よりも、はるかに可能性が大きいと思われる“仮説”は、これに参加した複数貞人間における“意見対立”ではなかろうか？前年末と次年末の間には、2旬閏が置かれている。そして、前述のように、置閏には定則が未成立で、その時々 of 状況において、適宜、設けられていた、と思われる。かつ、その根拠となったのは、当時の不完全な天文観測であったろう。それを如何に、いかなる理由に基づいて決定するかは暦譜構成（これは古代社会における王権そのものに深く関与していたとの理解は、広く殷代のみならず多くの古代社会に認められているところであ

る)の根幹に関わると認識されていたに相違ない。私は、断定は避けざるをえないが、この版に見られる“異常現象”は、それまでの貞人間における意見対立が表面化し、二閏設置を主張した由の意見が通り、反対意見であったその余の貞人たちが、一斉に、次年からの貞卜参加を拒否した結果だったのではないかと推測したい。

以上の考察から、更に、私は次のような推測を行なってみたい。

1. 殷代の貞人とは、「観象」の結果を折々の暦の決定に如何に反映させるかについて討議することを職掌とする人々であった。
2. 彼らは貞卜もまた、殷王室内における職掌のひとつとして、これを行なった。
3. 彼らは年々の暦編成について、置閏法を含め集団討議を行った。
4. その結果、意見が通らなければ、その暦法に基づいて貞卜を行なうことを集団で拒否することもありえた。

いささか仮説の部分も大きいですが、甲2122版における卜旬への諸貞人の参加の仕方の特異性を、以上のように推測するのが、最もわかりやすいのではないかと私は考える。

## 5 おわりに

これまで甲骨研究において「貞人」の存在、その研究の意義は極めて大きく、歴大な研究が積み重ねられてきた。しかし、そのすべては、これら貞人の、王室における亀卜の主宰者としての職掌を前提としたものであった。

本稿に述べたのは、一版の甲骨文中における“貞人群の異状行動”とも言えることについてのひとつの憶測であり、他にも類似の事例の発見に勉めることによって、より確実な推測をこころがけるべきであろう。しかし、もしこの憶測が正しいなら、貞人とは単に亀卜の中心的主宰者であったのみならず、観象結果を常時、王朝の定める暦のうちに如何に反映させるかという、古代王朝においては極めて重要な職掌をも担った人たち、ということになるはずであり、こういった観点から、殷代貞人の王朝内に果たした役割を改めて考え直す契機たりうるのではないかと考える。

## 付 記

本稿は、2013年11月に中央研究院歴史語言研究所（台北）で開催された国際学会「古文字學青年論壇」において、「圍繞置閏貞人意見相對立 —

以武丁時期卜旬卜辭為例 — 」としておこなった研究報告を、その場での討論を勘案し日本語に改めた上で、さらに新たな資料を補い、加筆修正したものである。

## 注

- 1 董作賓1945、下編卷五「閏譜三」。
- 2 陳夢家1956、第7章「曆法天象」。島邦男1958、三、置閏。また、島邦男1966。
- 3 飯島忠夫1930、新城新蔵1928、能田忠亮1943、橋本増吉1943。
- 4 楊升南1986および馮時2004。
- 5 董作賓1931。
- 6 董作賓1933。
- 7 実は、董作賓は、この版の存在を根拠に、董作賓1945において殷代の月には大月と小月が存した、という自説を展開しており、陳夢家1956や島邦男1958、さらには楊升南1986と馮時2004も、この点においては、董作賓の見解を踏襲しているものと思われる。また、裘錫圭2002も、常玉芝1998に依拠しつつ、月の長さで大月小月の配置について検討を加えたものであった。しかし、松丸道雄1989が指摘する如く、殷人の觀念世界における十個の太陽への帰依と、その甲骨文における実例からいって、甲に始まり癸に終わる十日の循環とそれによる月の切替りを殷人がそうやすやすと放棄したとは考えがたい。
- 8 殷代の曆法に関する研究には、年末置閏か年中置閏かという伝統的な議論もあるが、馮時2004によれば、年末か年中かを対比的に捉えるのではなく、暦月と二至二分を対応させるために閏を置く法則にもとづいて、これら4期に置閏されたものであり、年中、年末といった置閏法の相違ではない、としている。この考え方を採るべきであろう。
- 9 陳夢家1956、島邦男1958。および楊升南1986、馮時2004。

## 参考文献

### 〔日本語文献〕

- 飯島忠夫1930『支那曆法起源考』（1979、『飯島忠夫著作集』2、第一書房）。  
島邦男1958『殷墟卜辭研究』中国学研究会。  
島邦男1966「卜辭の殷曆—殷曆譜批判」『日本中国学会報』第18集。  
新城新蔵1928『東洋天文学史研究』弘文堂（1989、臨川書店復刻版）。  
能田忠亮1943『東洋天文学史論叢』恒星社（1989、恒星社厚生閣復刻版）。  
橋本増吉1943『支那古代曆法史研究』東洋文庫（1982、東洋書林復刻版）。  
松丸道雄1989「殷人の觀念世界」『中国古文字と殷周文化』東方書店。

### 〔中国語文献〕

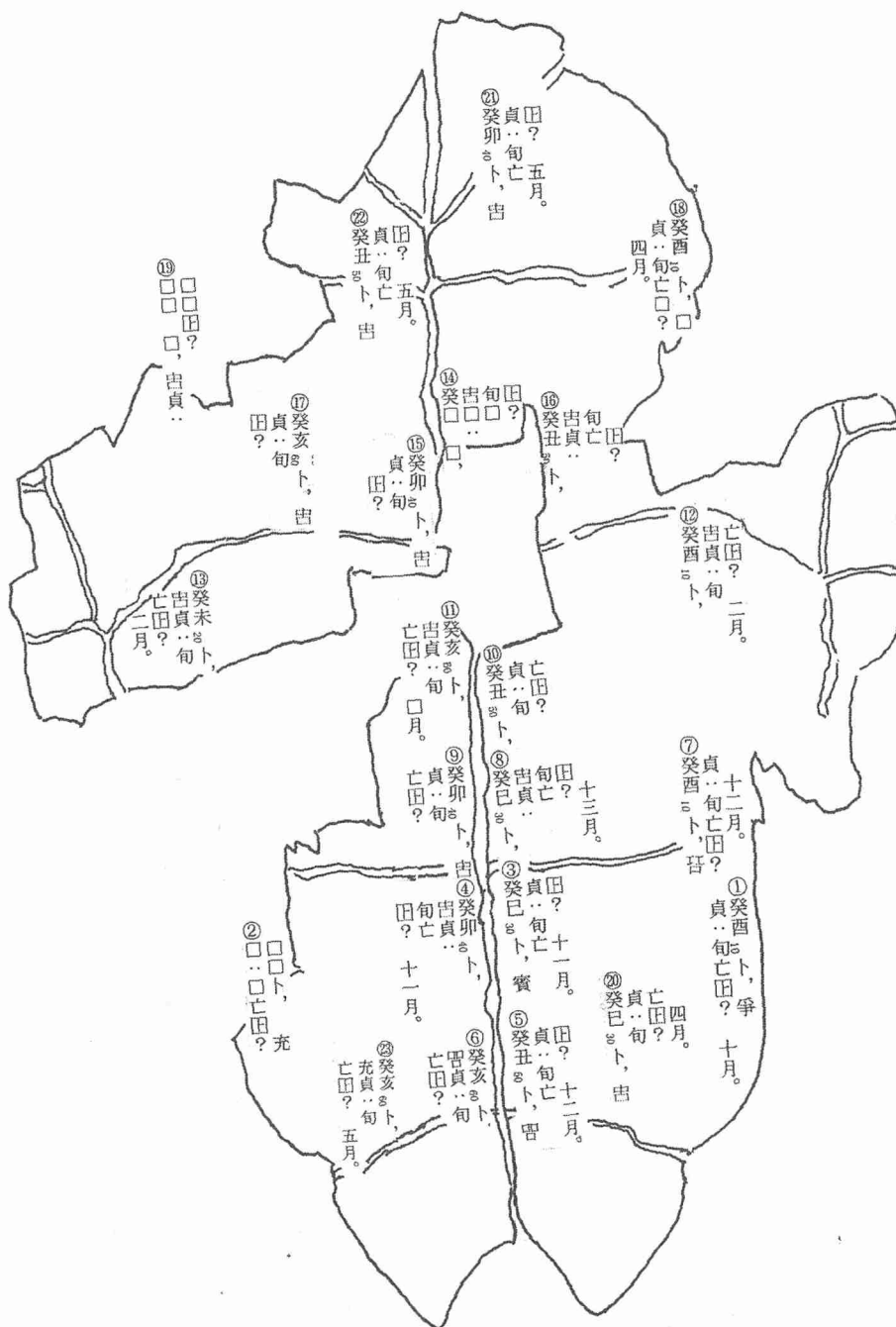
- 常玉芝1998『殷商曆法研究』吉林文史出版社。  
陳夢家1956『殷墟卜辭綜述』科学出版社。  
董作賓1931「大龜四版考釋」『安陽發掘報告』第3期。  
董作賓1933「甲骨文斷代研究例」『国立中央研究院歷史語言研究所集刊外編・蔡元培先生六十五歲慶祝論文集』。  
董作賓1945『殷曆譜』中央研究院歷史語言研究所；再録『董作賓全集』乙編第2冊、藝文印諸館、1978。  
馮時2004「殷曆武丁期間法初考」『中国歴史文物』2004年第2期。

- 裘錫圭2002. 「從一組卜辭看殷曆月的長度和大小月的配置」『揖芬集—張政烺先生九十華誕紀年論文集』社会科学文献出版社；再録『裘錫圭學術論文集』第1卷、復旦大学出版社、2012年.
- 楊升南1986. 「武丁時行“年中置閏”的證據」『殷都學刊』1986年第4期.

引用甲骨著録略号

- 甲 『小屯殷墟文字甲編』董作賓、1976、中央研究院歷史語言研究所.
- 合 『甲骨文合集』郭沫若主編、1978~1982、中華書局.





圖版 甲2122 + 甲2106 (合11546)

